

BPプログラム 取り組み紹介

山形県村山市

親に寄り添う支援の一步として

～山形県での取り組み～

特定非営利活動法人ポポーのひろば 理事長 佐藤 千津

地域にお返しがたくて

認知症の母を看取ったばかりの私は、家の中から社会に踏み出す一歩がとても不安でした。でもあれこれ助けてもらった介護時代を思うと、何か一つでも地域にお返しがたくて子育て支援を始めることにしたのです。

単なる思いつきですから知識もツテもありません。私は大きな書店に行き、育児関連の書架で一番分厚かった『子育ての変貌と次世代育成支援』(原田正文著 名古屋大学出版会)を買い求めました。読み進むうちに、それまで漠然と感じていたことがデータで裏付けられ、まだ何もしないうちからすっかり支援者気分になっていました。NPプログラムのこともこの本で知ったのです。

山形県村山市。人口二万七千人の小さな町ですが、それでもたった一人で取り組むには厳しいものがありました。そこで手作りのチラシを配って仲間を集め、子育て応援団を立ち上げました。市役所には「また来たの?」と思われそうなくらい足繁く通って文科省の家庭教育関連事業をいただき、子育て支援の基盤作りに精を出しました。

NP実施を思い描いて

頃合いを見て大阪へ行き、念願だった「NPファシリテーター養成講座」も受けました。受講してわかったのは共同ファシリテーションだったということ。山形県内では他にファシリテーターが見つからず、実施の方は当分お預けとなりました。

活動を開始して二年後、市から新設の親子交流ひろばを運営しないかという打診がありました。願ってもない話だったので急いで法人格を取得し、平成22年に委託契約をしました。現在は常設の『ひろば』運営と乳幼児の一時預かり、ファミリーサポートセンター事業を請け負う他、恵まれた自然環境を活用して親子キャンプや『森のようちえん』事業なども行っています。

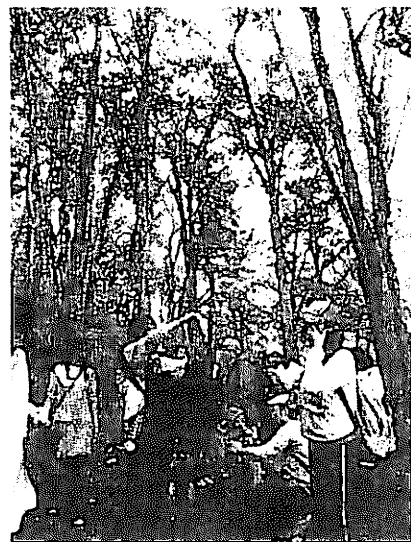
でも、どうしても諦めきれないのがNPでした。あの分厚い本を読み終えた日から、山形県での、村山市でのNP実施を思い描いていました。

今日一日がんばってね

そんな時、BPプログラムを知ったのです。これなら、私一人からでも始められる! さっそく東京一期生として「BPファシリテーター養成講座」を受けました。二日間なので、東京にいる娘のアパートに泊めてもらいました。歓迎し、おしゃれなカフェにも案内してくれたのに、翌日の模擬セッション準備で大忙し。親子の会話も交わさ

ず、黙々とテキストに付箋を貼り付けていたのです。娘は「大変だね〜。今日一日がんばってね」と言っていて、翌朝も気持ちよく駅まで送ってくれました。

「あ〜、本当に私は親失格。でも、だからこそ、ちゃんとやり遂げよう」そんな気持ちになったものです。



あのう、ずっと迷っていたんです

第一回のBPプログラムは、東北・北海道エリアにおいて最初に実施するBPでもあります。私たちの団体「ポポーのひろば」が主催、村山市には共催という形を取ってもらいましたが、福祉事務所も保健課も非常に好意的でした。

前期プログラム(生後2か月〜6か月)とし、該当者全員に役所の封筒でチラシを郵送してもらいました。ところが待てども申込者がありません。市内該当者が20余名しかいない上、「慎重な人が多い土地柄だ」と役所の担当者は言われます。こちらからアクションをおこさなくては、と思いました。保健課で実施している『離乳食教室』に向き、8組ほどの親子を前にBPを紹介しました。やや警戒態勢の中で「この子は3人目だからダメですよ。残念だ〜。参加したかったのに」と言っておさる人がありました。その笑顔に見覚えがありました。『ひろば』の利用者でした。彼女の一言で母親たちは心を開いてくれたのです。おかげさまで翌日から申込みが順調に伸びて、6組にまでなりました。

受付最終日の夕方、一本の電話が入りました。「あのう、ずっと迷ってたんです。出かけたこともないし、人と話すのも不安で」… 受話器から小さい声がとぎれとぎれに聞こえます。電話すること自体、勇気が必要だったでしょうに。そんな母親を受け入れることができ、幸せに思いました。参加者は7組になりました。

当たり前前の方が当たり前でないのだから

よう来てくれはりました

「待っています」感を出したくて名前が入ったきれいな案内カードを作りました。そして持ち物リストと一緒に送ると、ワークシートなどの準備に取りかかりました。

会場は私たちが運営する『ひろば』の隣室。アシスタントは「ポポーのひろば」から、あえて会計担当スタッフにお願いしました。2人とも保育士資格はありませんが、実施には何の支障もありませんでした。打合せでは、教えるのではなく母親に寄り添う姿勢が大切だと話していました（本当は、それこそが難しいのに）。

初目を迎えました。緊張ぎみに入室した参加者も、ここは間違いなく赤ちゃん連ればかりだとわかると表情が和らぎました。

本当は地元の言葉で語りかけたかったのです。「んだがっす～（そうですか）」とか「ほんてん？（本当に？）」とか自然に言えたら、その場の空気はもっと温かみを増すに違いありません。でも、私が口にするると変な感じ。ふと養成講座で、トレーナーさんの関西アクセントが東京在住の受講生に違和感なく受け入れられていたことを思い出しました。京都出身の私は「よう来てくれはりました」と、普段の言葉遣いで挨拶しました。山形弁がどうにもあかんかったら、標準語もなんやよそよそしかかったら、もう開き直るしかあらへんと思たんです。楽になりました。

参加者からは目が開けたような感想が

人と上手く話せるか心配していた参加者が、目をキラキラ輝かせたのは「お産の話」からでした。彼女たちにとって人生の一大事、まだ生々しいその体験を誰かに聞いてもらいたくてしょうがなかったのしょうね。人と人との間の壁が取り払われていくのを感じながら、セッション計画に沿って進めていきました。

このような居場所が待ち望まれていたのは明らかです。2時間後には帰りたくなり、長居する傾向が見られました。すると次のテーマは『赤ちゃんの生活リズムと環境』、よく考えられているなあと感じたものです。「赤ちゃんの生活リズムに合わせてあげましょう」というDVDの個所をみんなで確認すると、誰が急かすのでもなく終了後に帰り支度が始まりました。

テキストもDVDも不思議な教材です。目新しいことは一切取り上げられていません。でも参加者からは目が開けたような感想が出てきます。うれしそうに「昨日しなかったことを、今日突然できるようになる…の言葉にハッとしました！」と語られると、私自身も気づかされるのです。大切なことを忘れていました。確かに初めての子育てでは、当たり前前の方が当たり前でなかったのです。今までそんなことにも気づかないで、よく親に寄り添うなんて言えたものだと思入りました。

室内は笑顔に満ちて

最終回ピエロバランスの説明は、養成講座でも受講生の多くが難儀されていた個所ですが、「伝えようとして余計なことを付け加えるのではなく、示されたとおりの説明を」と指導を受けたことを思い出し、何度もシミュレーションしてみました。

ピエロが一生懸命綱渡りしている姿に自分自身を重ねてイメージしてみるだけでも、なぜか楽になるものです。耳を傾けうなづく参加者に、手応えのようなものを感じました。

会うたびにストレスが軽減しているのでしょうか、みんなきれいになっていきます。来年成人式を迎えるという人も、おとなな感じの人も対等でした。その2時間はなぜか子どもたちも泣かず機嫌がいいのです。互いに助け合い、室内は笑顔に満ちていました。

私も幸せな気分になります。いつも後からドッと疲れが出ました。何もしていないようで、結構神経を使っていたのでしょうか。

23年度内に自主事業として2回実施しましたが、24年度から市の主催事業になりました。年3回の予定だそうです。私以外にもファシリテーターが必要となり、今夏にスタッフが1名養成講座を受講することになっています。また最近になって、他市町の団体からBPについて尋ねられるようになりました。

県内での広がりを期待して

NPは、副理事長の受講によって体制が整いました。そこで託児費捻出と、実施実績ゼロの山形県内にNPを広めるため、やまがた社会貢献基金という助成金に応募しました。採択通知を受け取りましたが、助成額が目減りしていました。外部に委託する託児費だけで底をついてしまいそうですが、とにかく「ポポーのひろば」で一回は実施できます。

先日の『県家庭教育支援フォーラム』で話題となったのは、自己肯定感のない子どもがふえたという現状でした。そして行き着く先はやはり親の問題でした。BPやNPに対して好ましい評価が得られれば、県内での広がりも期待できると思います。

